

大人じゃなくても

いいですか…

成人向



大人じゃなくても
いいですか…



目次

表紙	イラストレーション	流一本	
中扉	イラストレーション	流一本	
目次			2
こみっく 大人じゃなくても いいですか…		流一本	3
SS 電車とトイレ		白朧	19
奥付			

あつ……

やっぱり……ダメです
こんなの……

やあ

ああつ

おいおい
今さらそれは
ないんじゃないか

で……でも……

梓ちゃんだったって
ほら！

ずぶん

はあああん

それにさあ……



ここでやめちゃうと
みんなに置いてかれ
ちゃうよ

やあ...

あつ...あ

ブツ
ブツ

あーん

あん



ああん...
すごいですう♡

お●んちゃん
気持ちいいよ♡

あの娘なんて
もう夢中にな
ってるよ

いいのかい？
また友達に
子供ばいってバカ
にされちゃうよ

君が大人になり
たいって言うから
オレの友達にも
手伝ってもらって
るんだよ

憂…純…
二人とも本当に
セックスしちゃうて
るんだ…

かわいい
おま●こだね

やつ…

ピラピラも
ちっちゃくて
キレイだ

処女なのに
こんなトロトロ
になってるよ

あつ…♡

ピク

薬とアルコール
が完全に
効いてるな

ん—♡

ちゅば

ちゅるる

ああつ

はああ

だめ…

あつ♡

あ〜♡

台台

ああん♡

台台

ちゅあ♡

頭が真っ白で
何も考えられ
ない…



すぐ射精するよ！

あ〜コレマジやべえよ
処女ま●こなの
具合良すぎ！

ああ



あつ…

はああ

ああつ

これが
おち●ちんの…

すいっ…

すごいよ
梓ちゃんの
おま●こ

ちつちやいの
お肉がプリプリ
で締め付けて
くる♡



だ…め
赤ちゃん出来
ちやうよお

いいねえ妊娠
大人への更なる
ステップアップだ



そらっ
子供ま●こで
孕め！

ああ〜っ！！

フー
最高のおまこ
だったよ
梓ちゃん

あ…

ああ…

おいおい
なかだし
さつそく腔内射精
かよ



まっ
オレも腔内に
射精すから
いいけどね



あーあーあー！

おほー
ホント
こりやい
ま●こだわ





アナルセックスで
大人度UP
しようね

ああっ！



お尻の穴も
ヒクヒク♡

ふああ



梓ちゃん
体温高い♡
ね♡

あっ…
あああ！



わかる梓ちゃん
君のかわいい肛門が
ぐばあつて拡がって
ち●ぽがムリムリ
挿つてくよ

おお…

ほおお…

はへえええ



あつ…

ああ…

あ…ん♡

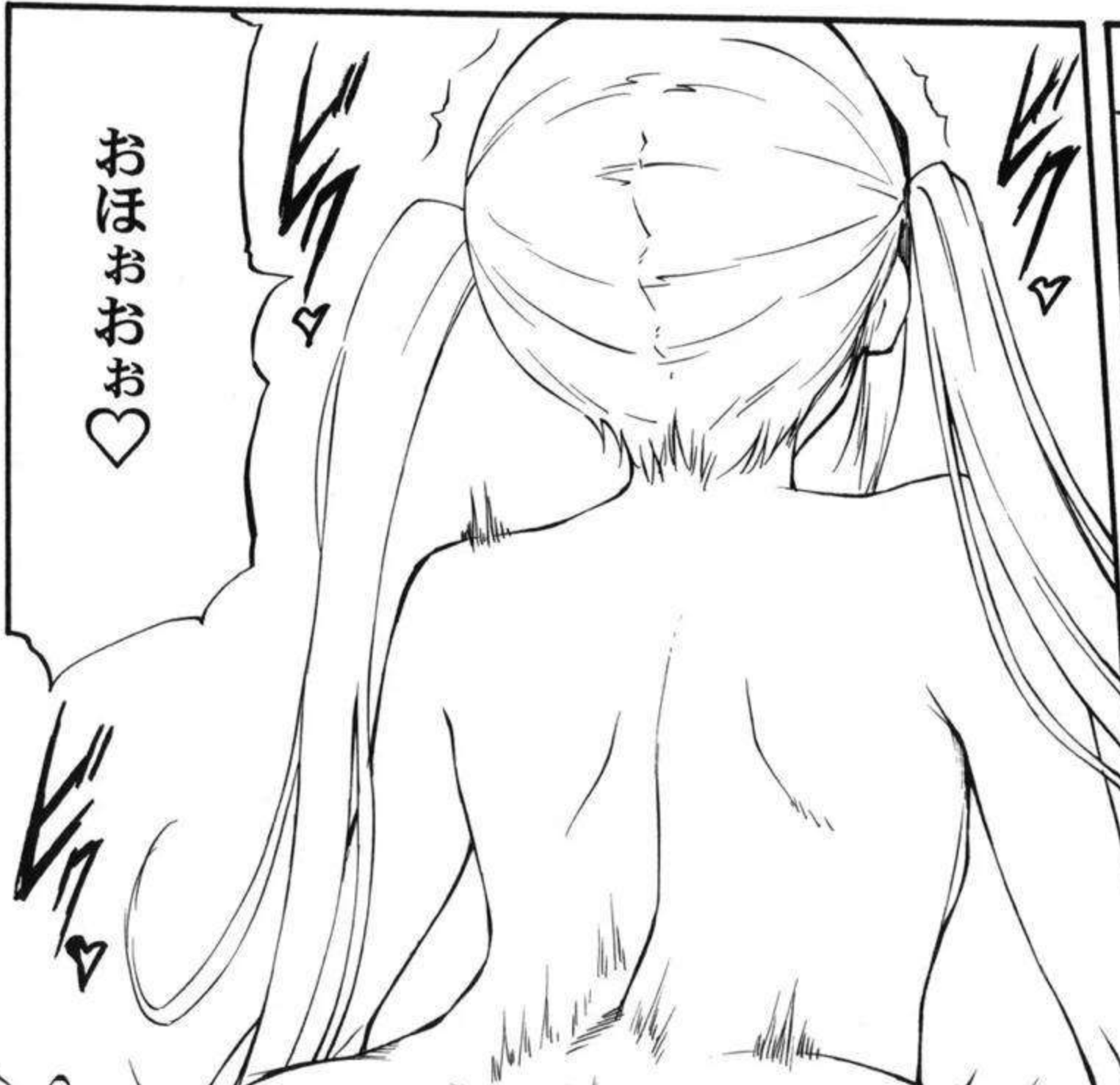
気持ちいいの
梓ちゃん
声が変わったよ

そんな…

ああ♡

あはん♡

ああ
たまんねえ
射精すからね
梓ちゃん



おほおお♡

お尻の中に
ビュルビュル
するよ！



きゅ♡

きゅー♡



らめ…



あつ...♡

ああ♡

すげ 肛門が開きっぱなしだぜ

はぁあ♡

あつ...♡

お尻がちつちやいから余計に目立つな

初めての
アナルで
イキやがった



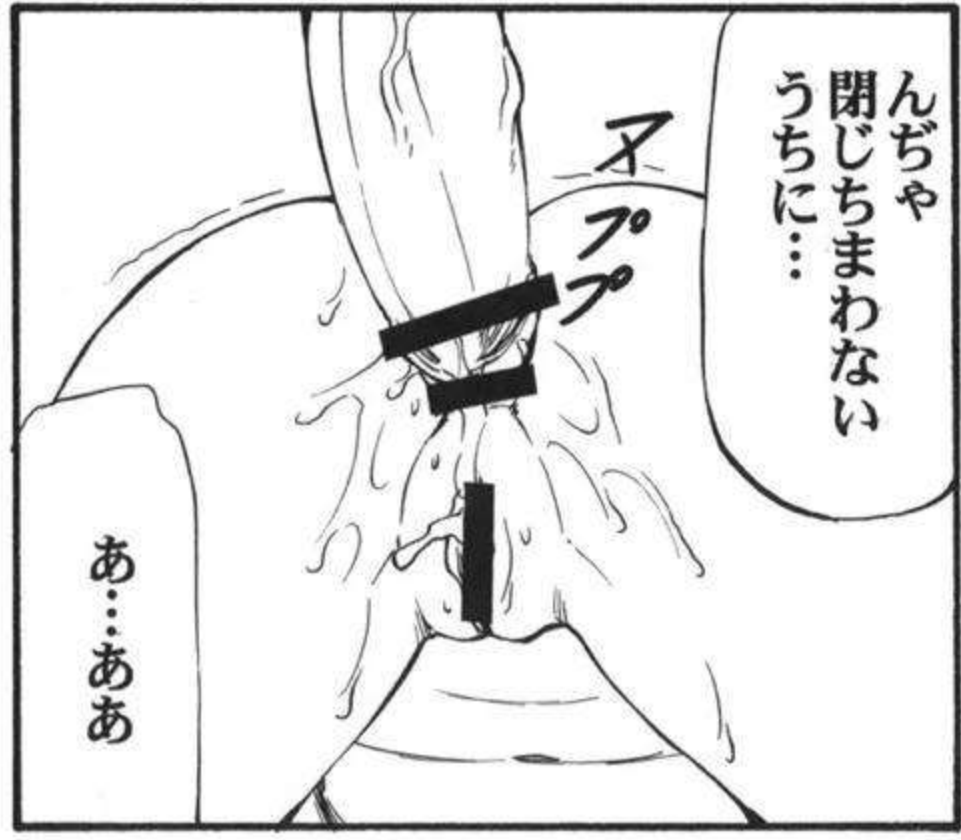
前にライブハウスで目をつけてから 何度か話してるうちに すっかり信用する ようになっつてよ

どこぞの女子高の生徒でさ 男に対する免疫が全然ねーのよ

あつ...あ♡

あへえ♡

あへえ♡



んぢや閉じちまわらないうちに...

あ...ああ

アプアプ



しかしよくこんなかわいい娘モノに出来たな

おひい♡

ズン

しかも連れてきた娘もすげえ上玉だったしな

純ちゃん♡

ちゅ♡

ちゅ♡

憂…

憂い♡

ん♡

ちゅ♡

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

梓ちゃんもチューしようチュー

ペロチュー♡

ふあい

んゅ

んゅ

んゅ



梓ちゃんも
口ま●こセックス
しようね

ぽぽ
ぽぽ
ぽぽ



あ〜♡

あへええ♡



んおおお…

あゝあ
おもらししちゃう
なんて梓ちゃんは
やっぱりお子ちゃま
だなあ

よあ
あ
あ♡



あーっ♡

あーっ♡

イク♡♡
イク♡

んひい♡
イク♡

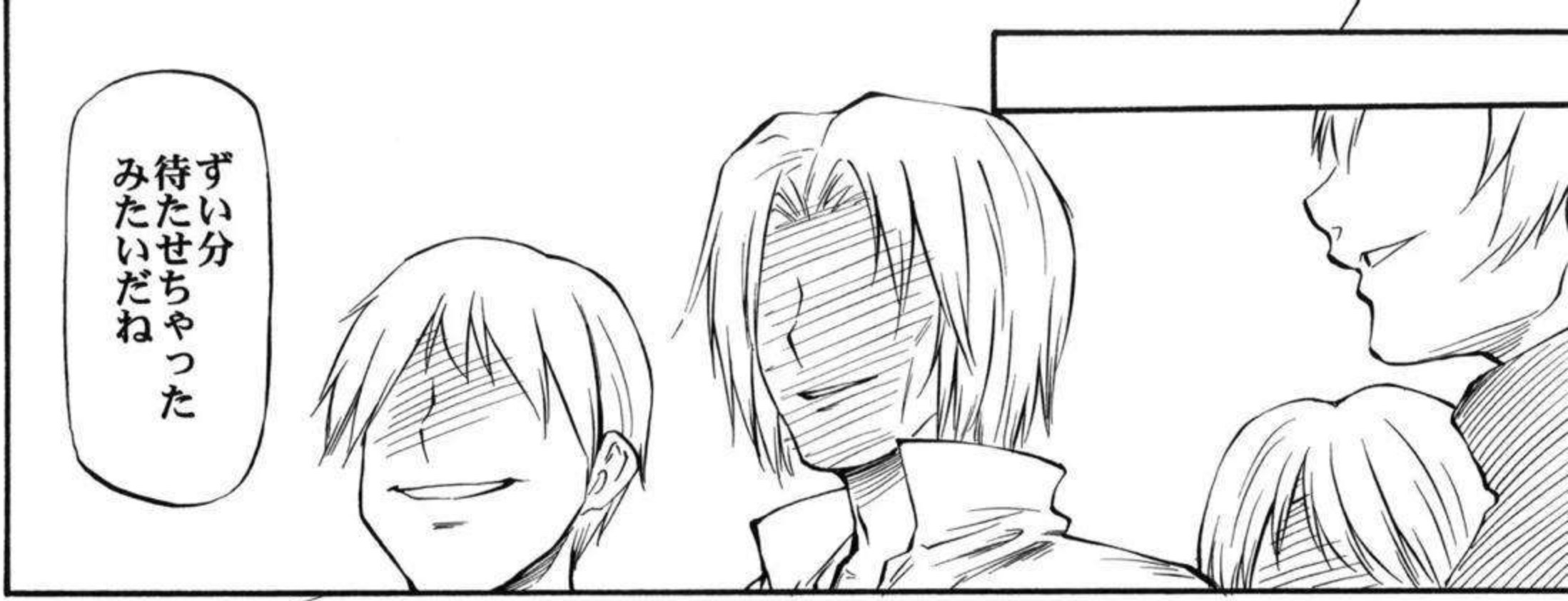
んひい♡
イク♡

イク...

イク

イク

イク



ずい分
待たせちゃった
みたいだね



ああん
早くうん♡

早くおち●ほ
下さあい♡



おほおほ

ち●ぽキター♡

ち●ぽ♡

ち●ぽ♡



それでも母乳は出るんだから大したもんだよ

ひゃああ♡

ミルク出ちゃう♡



妊娠すればおっぱいも大きくなると思っただけで大して変わらなかったな

ああんそれは言わないでえ



今度は例の
先輩4人も
連れてきな

はあい♡

もう大人とか
子供とか
どうでもいいや♡

電車とトイレ

著者 白蘭

駅前道路には車が少々走っているが、駅前に人通りは多くない。

滯は、秋めいた風に合わせた雰囲気を感じられる私服を着ていた。本来の滯の落ち着いた雰囲気です。誰にも気づかれないように、誰も気づかないように。

しかし、滯は待ち合わせのように駅の入口から少し離れたところにいるが、その姿はなにか落ち着かず、補導員などがみれば質問されそうなたたずまいだった。

少しそわそわし、周囲の人に気を向けて、実に落ち着かない様子だ。その滯に二十代くらいの男が近づいてくる。

「すみません」

正面から男に声を掛けられる。

「あ、……はい」

滯は少々取り乱した。男が補導員や警察ならすぐに連れて行かれそうだ。

「あの……、なにか御用ですか？」

男は、ポケットからカード取り出した。プラスチック製のクレジットカードのようだが、真っ白いカードには、手書きで、「みお1番」と書いてある。

「あ……」

そのカードを見た滯は、顔を紅くしてうつむいた。

「やっぱり可愛いな。滯ちゃん。ネットの画像だと荒いからちょっと心配だったけど」

下心丸出しの顔で褒められても嬉しくないが、一応お礼を返す。

「はい……、あ、ありがとうございます……」

「はい、そんなに緊張しないでいいですよ」

男はそつと滯の肩に手を伸ばし、滯を誘い歩きだした。二人は連れ立って駅に入ってい

く。

滯は駅の車椅子用のトイレで、男が取り出したネックレスのようなものを見て首をかしげていた。

「コレ……、は……?」

大きさの違う玉が何個もつながっている。数は十個くらいだ。先端は直径二センチ程度だが、少しずつ大きくなっている。最後の方はピンポン玉に近い。中は空洞のようで、鈴のように音が響く。

「アナルピースだよ」

「え? あな……、えッ!」

その言葉の意味を悟ると、滯は身を硬くした。

車椅子用のトイレに連れてこられた時に、覚悟はしていたが、いざ直面してみるとその覚悟は脆く揺らいでいた。

「すごいんだぜこれ、ローションなしでもばっちり。これで滯ちゃんのアナル調教もばっちりだよ」

滯は、覚悟をきめるとスカートの中に手を入れて、ショーツを捲りおろした。

途中で躊躇したが、あんなものを入れられる途中で粗相をすることを考えると、ショーツは脱いでしまった方がいいと考える。靴も脱いで、足先からショーツを抜いた。

「お、お願いします……」

我慢しているが、緊張によつて声を震わせている。

滯は車椅子用の支持バーを握りしめ、身体を支える。そして、後方にお尻をぐつと突き出す。

「滯ちゃん、もう濡れ濡れだよ」

「そ、それは……」

「これからされるイヤらしい事を想像して、こんなに濡らしてるなんて、滯ちゃんはヘンタ伊さんだね」

滯は、イヤらしい秘部を見せつけながら、膣口をひくつかせ、愛液を垂らしている。

見られる刺激と、これからどんな風に舐めを弄りまわされるかという期待だけで、舐めが

発情してしまっている。

「入れるよ……」

男は、トロトロの秘唇にアナルビーズを押し付け潤滑油代わりにすると、先端の小さな玉をアナルに押し当てた。

ほくしてないにもかかわらず、ビーズは呑みこまれるように入っていた。

「っ、冷たい……」

澤は呻き声を上げた。痛みはないが、ひんやりした硬いものが圧迫する感じが伝わってくる。

「二個……」

「んっ、ああっ……」

アナルビーズに仕込まれた鈴がか細く響く。

「三っ……」

「んんっ……」

澤は苦しそうに眉根を寄せる。小さな玉といつても数が多くなるにつれて圧迫感が増してくる。

「四つ目……、う……硬いな、んん……、入った」

アナルに無理矢理押し入ってきた玉は、先に入っていたビーズを奥のほうへ押しやり、腸内をゴリゴリ圧迫してゆく。圧迫感に澤は軀を震わせる。

体内に鈴の音が鳴り、鼓動のように響く。また体外にある分は高い音を出していた。

「うっ、うっうっ……」

澤は、脂汗と愛液を噴き溢しながら、腸内で膨張する圧迫感に耐えていた。

「もう、一個……」

「えッ！ ムリッ、無理ですッ！」

「でも、スカートが短いから外を歩いてると……」

「ああッ！」

澤は、ビーズを肛門から垂れ下げながら歩いている自分を想像してしまった。

「どうする??」

「……………」

澤は、覚悟を決めゆっくりと頷いた。

男は嗜虐心をくすぐられてにまにまと笑っていた。

「じゃあ、五個目……」

男は指先でピンポン玉に近い大きさのアナルビーズを押し込んだ。

「うーッ！ うっうっ、うっうんんーッ！ んんっ！ はあはあはあ……」

澤は押し入ってくる異物感と、腸内で膨れ上がる圧迫感に耐えるために、力いっぱい手すりを握りしめていた。

五個目のビーズを押し込んでゆくと、澤の背中が大きく震え、秘唇から愛液が滴った。

「又ブッ！」

「入った……」

「ん……、くう……はああ」

澤はゆっくりと軀を起こすと、その動作に反応してアナルビーズの鈴の音が鳴り始める。

気を抜くとすぐにアナルビーズ排出されてしまいそうなので、必死に気を張っている。

「じゃあ、行こうか」

澤は、アナルビーズを納めたままゆっくりと男に従ってトイレから出る。

澤は、扉の横にあるバーにつかまりながら、窓の外の風景に意識を向けていた。

電車はさほど混んではおらず。シートも空いているのだが、座ったら気が緩んでしまいそうだ。

スカートの中はノーパンで秘唇は丸出し、直腸にはアナルビーズを詰めて、その内部に納まらない部分は尻尾のように下がっている。

スカートで見えないが、いつ何が起るかかわからないので気を緩めるわけにはいかない。

間欠的に便意が襲ってきて、紛らわせようと身悶えすると、お尻からぶら下がったビーズの鈴の音が鳴る。

電車の振動で下肢に力を入れるため、肛門括約筋が縮まってしまい、そのたびにアナ
ルピースがゴリゴリと直腸の中で移動する。

揺れたピースが太腿に当たるときのひんやりした金属の感触が鳥肌を立たせる。

「うっ……」

(苦しい……)

官能と便意を我慢して、体中から冷や汗が吹き出て、身体が小刻みに震えてくる。

蜜と脂汗を吹き出しながら、便意に耐えていると濡のお尻に、大きな温かいものが触
れてきた。

男の手がスカートを捲り上げて、お尻を撫で回している。濡は、顔を赤くして俯いた。

男の手が我慢できないとばかりに、お尻を這い回る。膣丘を撫で、アナルピースを軽
く引つ張ったり。

行為はどんどん激しくなっていく。

電車はそのまま駅のホームに入っていく。

「行こうか……」

濡は、行為に耐えながらゆっくりと頷いた。

「あつ、あああつ！ あんツ！……んんツ」

駅の車椅子用のトイレで、濡の解放されるような声が響き、甘い吐息で満ちる。

男の指が上着の上から濡の舐を撫で回し、体表をなぞりつつ太腿まで降りてくる。

「べちよべちよだねえ」

「ああつ、言わないで。は、……恥ずかしいツ」

男は、恥丘に手を当てて、クリトリスと尿道口の上辺りを指先でこすっている。

男が指先で秘芽を捕らえた。人差し指と親指でくねるように弄り回す。

「あつ、ああつッ！ ダメっ、だめえッ！」

濡の舐が快感に震え、アナルピースの鈴の音がリンリンと細い音を鳴らす。

子宮が疼き始め、絶え間なく襲ってくる便意がより激しくなり、下腹部が暴れてく
る。

「ああつ、あつッ。あああああッ！」

濡は背筋を仰け反らせ、舐を引きつらせる。脱力した濡は、かろうじて手すりに寄り
かかる。

男は濡のお尻の穴から垂れ下がっているアナルピースをもった。

「濡ちゃん、じつとしてね」

濡は、手すりをしっかりと持ち直し、四肢に力を入れる。

男が強くピースを引つ張る。しっかりと閉じていたお尻の穴が魚の口のように大きく開
き、ピンポン玉程の大きさのピースがゆっくりと引き出される。腸液にまみれたピース
は濡の体温で温められ白い湯気をまとっていた。

「あああッ、あああッ」

再度力を入れて引くと、数珠つなりのピースがずるずると引き出される。ピンポン
玉程のが大きく、後は少しずつ小さくなっていくから簡単に引き出せた。

「あと、二ツ」

「ああつ、あああツ、ううっ、いいイ、いいのお……」

アナルピースを引き抜く行為は強い快感を与えているらしい。

アナルピースを全て引き抜いてから、男はぼっかりと口を開ける穴にペニスを突き入
れた。

腸壁を擦りながら濡の直腸は男のペニスを受け入れる。

「いいツ！ き、気持ちいいツ！」

濡は手すりを持って上半身を支え、より深く倒れていく。その角度に合わせ、男の男
根はより深く侵入していく。

アナルピースで慣らされたせい、挿入時の苦しさもなく、ただ快感だけが襲って
くる。

「ううっ、んん、んんんツ！ き、……気持ちいい……」

「すげえ、濡ちゃんの穴、すげえ気持ちいいよ……」

男が激しく腰を振り始めた。

「あつ、ああつ、いいっ、いいのおッ！ お尻……、いいのお！」

ノーマルセックスとはまた違った快感が濡の舐を貫いてゆく。アナルピースでほぐされ
たためか、圧迫感も苦痛も感じられ

ない。

男は一心不乱に腰を振り続けている。亀頭のエラが、直腸粘膜を擦り、肉壁がそげ落とされるような勢いでピストン運動が繰り返される。

滯の脳裏には光が瞬き、広がってゆく。

「イクッ、イクウッ！ イッチャウッ！」

男は滯の体を揺すり上げながらも、亀頭で腸奥を激しく突き上げた。アナルピーズで拡張し、お尻の穴も「女」としてほぐされた肉壁の感触は最高だった。

「うっ、も、もうっ……」

男は、柔らかく、しかもキツく締め付ける肉壁に対してもう限界だった。

滯の躰がブルブルと痙攣し、もう絶頂は近そうだった。躰が痙攣すると同時に腸壁も痙攣し、より男根に刺激を与えてくる。

「イクくうううッ！」

ペシペシと滯の尻肉と腰がぶつかる音が響き、粘液の擦れる音が卑猥に重なってくる。「はぁあ、……き、気持ちいいッ！」

トイレの中は、男女のまぐわいの臭気で満ち満ちていた。発散される匂いに換気がとても追いついていない。

「ううっ、出るッ」

男が最後のスパートとばかりに腰を激しくする。

「くださいッ！ いっぱい……、せ、精液を……くださいイイ」

男は止めとばかりに腰を突き入れた。

ドクッ！

「はぁん！ 熱い、いいイイッ！」

滯は背筋を仰げ反らせ、その躰は激しく痙攣していた。

熱い精液は、アナルの粘膜に染みていく。激しく突き入れられたモノが躰の奥にまで達すしていた。

崩れそうになる体をすんでのところで支える。

「ううっ、キツい……」

男根から精液を搾りつくすように、肛門括約筋が締め上げる。精液を大量に出された滯は満足げな表情でうっとりしていた。

滯は、駅を出ると男と別れた。

カードは回収してある。一時間休憩して次の男、「みお2番」との待ち合わせだ。

滯は火照った顔を外気で冷ましながら、歩いてゆく。

終幕

あとがき 代りのスタッフの日常つーか、グチ

白朧　　もうこうなるしかないのか
止めることの出来ない男達の思い(シア集め的な意味で)
そして多分予想通りであろうオウガバトルを
半ば諦めの眼差しで、ただ見守るしかない周囲の者たち
加速するバトルの中、一部のキャラを除く次第に失われていく出
番(固定キャラ参入するから)
なぜ出番がないのか？なぜ戦うのか？
問うことすら意味を持たないこの戦いを宿命と呼ぶのなら
罪はむしろそれを課した神にこそあるのか
次回「風呀の叫び」

くろうさぎ　なにやっとなるんだ。ゲシッ！
白朧　　お前は、弓垂惨射淫(キュアサンシャイン)！
流一本　　知っているのか白朧！
白朧　　古代中国で、王朝に弓を引き、王位を奪取したのち、宮中の家臣
を惨殺し、女官に淫猥な行為を働いたもの総称を弓垂惨射淫(
キュアサンシャイン)という。

くろうさぎ　民明書房 古代中国の王朝の末路より
誰か、陽の光浴びる一輪の花だ。そのサイバーのパクリの変な予
告は何じゃ？話教混ぜてるし！

白朧　　タクティクス風呀の予告だな。(流石にセラムン風はちょっと……)

くろうさぎ　風呀か？
白朧　　風呀だ。
くろうさぎ　風呀なら仕方ないな。もうクリアしたんか？
白朧　　もうすぐ死者の宮殿を115階まで降りられるかな？
くろうさぎ　まあ、頑張れ。

12月某日
とあるヴァレリア島？にて



奥付

発行 リーフパーティー
発行日 2010/12/31
発行人 くろうさぎ

ホームページアドレス
<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 大陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載
インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止

YES or NO

LeLe!まぐま

vol. 18